

東日本大震災復興支援プロジェクト

日本とオーストリアをつなぐ架け橋 !! 誰もが喜びを実感することができる、参加する「第九コンサート」

第一回
歌う DAIKU
in ウィーン

第九

Sinfonie Nr. 9 d-moll op. 125

会場：ウィーン楽友協会大ホール「黄金の間」

2014年3月5日開催

主催：(社)世界音楽合唱チャリティー協会

共催：オーストリア政府観光局

後援：オーストリア大使館、観光庁、ウィーン市観光局、日澳文化協会

特別協力：Künstlersekretariat Buchmann GmbH

東北復興支援チャリティー、 聴く「第九」から、歌う「DAIKU」へ。

著名なソリスト、ウィーン少年合唱団、MJC アンサンブルとともに「復興への絆」を歌い上げましょう！

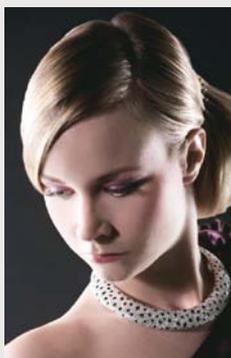
約190年前に生まれたベートーヴェンの最後の交響曲「交響曲第9番ニ短調作品125」は、日本では「第九」と呼ばれ、聴くだけでなく、多くの人たちと合唱する日本独自の「第九文化」を創りあげました。そこには参加者だけが感じることができ、一体感、達成感、満足感が生まれます。ぜひ、日本オーストリア友好のコンサートへご参加ください！

単なる「楽しみ」のために 第九を歌うではありません。

震災と原発事故という未曾有の出来事に遭遇した私たちは、世界中の人々から物質的・精神的支援を受けました。それによって日本のことを自分たちのことのように心配し、応援し、支えてくれる「友人たち」が世界中にいることを知りました。今度は、私たち日本人が世界へ飛び出し、日本は復興の道を歩み始めていることを伝えたい。そして、世界とつながっていただけることの喜びを歌い、支えてくれた世界中の「友人たち」への感謝を歌いたい。これが、このイベントの理念です。このプロジェクトの収益金の一部は東日本大震災遺児等支援義援金として福島県南相馬市へ寄付いたします。

アーティスト プロフィール

■ マーラ・マシュタリール <ソプラノ>



1984年ウィーンに生まれ、子供の頃から児童合唱団のメンバーまたソリストとして、ウィーンの大きな舞台に出演。それ以外にも演劇、映画、テレビでも主演に抜擢される。2009年1月には東京の新国立劇場で「偽の女庭師」のサンドリーナを歌う。2009年6月には「ナクソス島のアリアドネ」のエコー役でウィーン・フォルクスオーパーにデビューし、2011年にはウィーン芸術週間にもデビューした。2012年/2013年のシーズンには、「ワルツの夢」のヘレネ、チャールダッシュの女王のスタージ、「フィガロの結婚」のバルバリーナとして出演。

■ 小山 由美 <メゾソプラノ>



日本を代表する国際的なメゾソプラノ歌手。1996年に「ワルキューレ」のフリッカ役で日本デビュー。1997年に新国立劇場開場記念公演「ローエングリン」のオルトルート役で力強い歌唱を絶賛される。その後イェヌーフア、カルメン、アムネリス、ヴェーヌス、クンドリー、イゾルデ役等で賞賛を得る。国外ではパイロイト祝祭歌劇場、ローマ歌劇場等でワーグナー歌手として活躍。2008年には第4回ロシア歌曲賞を、2009年には「マクプロス家の事」で“日本オペラ上演で特筆される業績”という高い評価で第40回サントリー音楽賞を受賞した。

■ ヘルベルト・リッパート <テノール>



幼少よりウィーン少年合唱団に入団し、ソリストとして活躍。カラヤンやサヴァリッシュの指揮のもと、ボーイ・ソプラノとしてのレコード録音も残っている。テノールになってからは、G. ショルティや W. サヴァリッシュが彼を高く評価し、ショルティとは「マイスタージンガー」の録音でダーヴィッド役を務めグラミー賞を受賞している。ウィーン・フィルとの共演も多く、歌曲のタペでの活躍と共に、オペラの分野ではウィーン国立歌劇場で活躍中。日本やアメリカでの活躍もめざましい、オーストリアを代表するテノール歌手である。

■ 甲斐 栄次郎 <バリトン>



東京藝術大学卒業、同大学院修了。ニューヨークとボローニャにて研鑽を積む。2003年、ウィーン国立歌劇場にデビュー、10年間にわたり専属ソリスト歌手を務め、出演した舞台は40役で300公演を超える。グルベローヴァとの共演で歌唱、演技共に高い評価を得た「ロベルト・デヴェリユー」ノッティンガム公爵をはじめ、エンリーコ、ベルコーレ、シャープレス、マルチェット、レスコー等、イタリア・オペラ作品において特に高い評価を得ている。国内では、オペラ出演の傍ら“第九”や“ドイツ・レクイエム”等のソリストとしても活躍。

■ ウィーン少年合唱団

現在、「天使の歌声」で知られるウィーン少年合唱団には、10～14歳までの少年が約100人所属し4つのグループに分かれて活動している。ウィーンで行われるオペラ、コンサート、王宮礼拝堂での日曜日のミサに出演するほか、各メンバーは年間9～11週間の公演ツアーに参加する。一年間に行われるコンサートは約300回、観客動員数は約50万人にも及ぶ。中世音楽から現代音楽まで、クラシックの合唱曲から世界の音楽、ポップスや映画音楽までと、レパートリーは幅広い。そして今回、このプロジェクトの理念に賛同し、合唱団の歴史上で初めて「第九」を歌う。



日本人がつくった「参加する第九コンサート」

第九の第四楽章「歓喜の歌」は、ヨーロッパ全体を称える「欧州の歌」として欧州評議会と欧州連合がともに、ヨーロッパを象徴するものとして採択しています。

そんなヨーロッパを象徴する「第九」が日本の年末に盛んに演奏されるようになったのは、第二次大戦後のことでした。戦後の物資困難にあえぐ日本のオーケストラの年越しの資金確保の手立てとして毎年演奏されたり、昭和29年以後は、労働者による音楽鑑賞運動の推進役である「労音」(日本労働者音楽協議会)の年末企画として毎年演奏されて人気を博し、平和推進運動の高まりとあいまって、平和・復興の象徴のような曲となったのです。

その結果、プロ、アマを問わず多くの合唱団が「第九」をレパートリーにとりあげ、はては「第九」を歌うための合唱団さえ生まれるようになりました。その象徴的イベントが1983年、大阪城ホール開館記念事業として行われた「サント

リー1万人の第九」です。一般公募で結成した1万人の合唱団に加えて、聴衆も部分的に参加した壮大なる「第九」の歓喜の歌が演奏されました。この後、全国各地で同様の大規模な参加型「第九」演奏会が継続的に開かれ、今日にいたっています。現在では、第九合唱ファンは20万人を数えます。

戦後、平和と復興の象徴として演奏された「第九」こそは、東日本大震災からの復興と再生を表現するためにふさわしい曲といえるでしょう。さらに、日本独自の「歌うDAIKU文化」を世界中の人と共有することで、新しい市民レベルでの参加型文化交流の象徴的イベントとしたいと願っています。

今後の私たちは、経済面での復興だけでなく、人と人との繋がりを通じて世界に貢献する、人間性の復興を目指さなければなりません。そうすることによって、世界から得た支援に応えることができるのではないのでしょうか。

会場は「ウィーン楽友協会」

今回のコンサート会場は「黄金の間」とも呼ばれるウィーン楽友協会大ホールです。ウィーン楽友協会(ムジークフェライン)は1812年に設立されたウィーンを代表する音楽の殿堂で、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の本拠地。毎年元日に行われるウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートは、この大ホールから全世界に中継されています。世界中の音楽ファン憧れのホールに立てる、またとない機会です!



■ コーラス・ヴィエネンシス [合唱指揮: ラオウル・ゲーリンガー]

1952年に設立されたコーラス・ヴィエネンシスは、日曜日にホーフブルク王宮のチャペルでウィーン少年合唱団と一緒に歌う傍ら、あらゆる時代の男声合唱のレパートリーを様々な合唱指揮者の下で歌っている。現在の合唱指揮者はラオウル・ゲーリンガーが務めている。コーラス・ヴィエネンシスは多くのコンサートでその多面性を証明しており、また、男声合唱のレパートリーを保存することも目的のひとつとしている。現在約50名のメンバーが活動しており、全員がウィーン少年合唱団の出身である。長年培った強い絆と音楽を心から愛する気持を大切にしている。



■ MJC アンサンブル (南相馬ジュニアコーラス アンサンブル) [合唱指揮: 金子洋一]

南相馬で活動している中高生合唱団『MJCアンサンブル(南相馬ジュニアコーラスアンサンブル)』は「福島親善大使」として、日本のみならず世界各地で行われるチャリティーコンサートに出演しており、震災復興支援の象徴として活躍。2011年12月18日に福島県南相馬市で収録された『ハビネス』(AI with MJCアンサンブル)は、YouTubeで60万超の視聴回数を記録している。2012年5月には、東京でウィーン少年合唱団と共演し、これをきっかけに、今回の「歌うDAIKU inウィーン」出演が決定。ウィーン少年合唱団との共演を再びウィーンにて行う。

■ ウィーンカンマーオーケストラ [芸術監督: シュテファン・ヴラダー]

ウィーンカンマーオーケストラは1946年に創立され、かつての首席指揮者カルロ・ゼッキ、そしてゲストコンダクターだったユーディ・メニューインとシャンドール・ヴェーグはオーケストラにとって特別なパートナーであった。最近の首席指揮者にはフィリップ・アントルモン、エルンスト・コヴァチッチ、クリストフ・フェルレ、そしてハインリッヒ・シフが就任。2004年からは準ゲスト・コンダクターに服部譲二を迎えている。2006年にはシフ指揮によるベートーヴェンの交響曲全曲演奏が行われ好評を博した。2008年5月からはシュテファン・ヴラダーが新しい芸術監督および首席指揮者に就任。以後、オーストリア国内のみならず国際的にも更なる飛躍を遂げている。



シュテファン・ヴラダー

1965年ウィーン生まれ。1985年には国際ベートーヴェン・ピアノコンクールで最年少優勝を果たす。以後ピアニストとしてキャリアを積み、アッパード、メニューイン、シャイヤー、小澤征爾、ティーレマンなどの著名な指揮者のもと、ウィーン・フィル、ウィーン交響楽団、コンセルトヘボウ管弦楽団、シカゴ交響楽団、NHK交響楽団などのメジャー・オーケストラのソリストとしても活躍。指揮者としては、ウィーン交響楽団、ザルツブルクのモーツァルトフェスティバル管弦楽団、リンツのブルックナー管弦楽団、バンベルク交響楽団、デンマーク放送交響楽団などをゲストコンダクターとして指揮し、前述の通り2008年にウィーンカンマーオーケストラの芸術監督および首席指揮者に就任。2010年にはウィーンカンマーオーケストラを率いてドイツ各地で演奏旅行を行い大変な好評を得る。



音楽は、日本とオーストリアの関係を橋渡しする重要な役割を果たしています。ならば、第九を歌うという日本の伝統を、両国の音楽交流に結びつけるのに誰も異論はないでしょう。なんといっても、音楽の国オーストリアには、多様かつ活動的なコーラスの伝統があります。

そしてベートーヴェンの交響曲第9番は、ベートーヴェンが暮らし、作曲活動をしたオーストリアにとって、特別な位置を占めるものです。

こうした事情が、日本のコーラスをオーストリアに招聘し、オーストリアのコーラスやソリストと一緒に第九の演奏会を行おうという計画の背景にあります。

音楽による文化交流、観光、そして人と人との直接の触れ合いの場づくりを、ひとつのコンセプトに調和させたこのプロジェクトは、日本とオーストリアの間に新しい、そして価値ある絆と友情を築くのに貢献することでしょう。このプロジェクトを進めてきた各団体の皆様からお祝いを申し上げます。

第一回 歌う DAIKU in ウィーン

参加条件

●ご参加にあたりオーディションは行いませんが、ベートーヴェン「交響曲第9番合唱付き」第4楽章を原語(ドイツ語)にて、すでに舞台上で歌った経験があることが条件となります。

●今回の演奏会では、ペーレンライター版の楽譜を使用いたします。ご参加者各自にてご用意ください。

●個人での参加は受け付けておりません。お申し込みは募集取扱旅行会社にご相談ください。

※【ご注意】参加予定アーティストは、健康状況・その他事情により予告なく変更される場合もございます。予めご了承ください。

日本国内での練習会

ツアー出発前に、日本で2回の練習会を行います。原則として、両日とも参加必須にてお願い申し上げます。練習会場までの交通費は各自ご負担にてお願い申し上げます。練習は2014年1月と2月に各1回予定しております。日時・会場が決定いたしましたら、追ってご連絡申し上げます。

現地での練習会

現地での練習は下記の通り予定しております。

2014年3月4日(火)

会場：バウムガルテン・カジノホール

10:00~13:00:

指揮者による合唱&ソリストの練習(ピアノ伴奏)

16:00~17:30:

オーケストラとの練習(合唱、ソリスト、オーケストラ全員参加)

2014年3月5日(水)

会場：ウィーン楽友協会大ホール(黄金の間)

10:00~: ゲネプロ(全員で通し練習)

19:30開演: 『第1回 歌う DAIKU in ウィーン』本番

公演終了後: 祝賀交流会

公演に関するお問い合わせ 一般社団法人世界音楽合唱チャリティー協会

TEL: 03-6277-7056 E-mail: w.m.c.asso@hotmail.co.jp www.utau-daiku.jp